

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の 1年度目)

1. 研究課題

(和文) 人文学研究資料にとってのWebの可能性を再探する

(英文) Re-exploration of Web for resources of the humanities

2. 研究代表者

(氏名) 永崎 研宣

3. 研究期間

平成 25年 4月 から 平成 28年 3月 まで

4. 研究目的 (400字程度)

Web技術の発展にともない、人文学資料向けのWebサービス（以下、人文系Webサービス）においてもサービス同士の相互連携をはじめとする様々な面での新しい可能性が大きく拓けてきているが、古い設計に基づくシステムやデータの改良は容易ではなく、結果として、最先端のWeb技術が投入されたものとそうでないものが入り乱れた状態になっており、利用者にとっての利便性という観点からは改善の余地がますます大きくなってきている。本研究の目的は、人文科学研究所における各種Webサービスを中心としつつ、本研究の共同班班員が関わっている様々なWebサービスの事例も含め、現在のWebサービスとして求め得る水準と実際のその距離を再検討することで、それを縮めるための方策を明らかにすることにある。この再検討にあたっては、各種人文系Webサービスの研究における意義だけでなく、当初計画や依拠する規格、予算の性格、低コストな改良可能性など、学会研究会で報告されにくい部分にも焦点をあてていくことで、問題の具体的な解決策に少しでも近づけることを目指す。

5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

本年度は、非公開の研究会を2回、公開シンポジウムを3回開催した。第1回の研究会においては、大向一輝氏によるCiNiiのリプレースに関する報告と、各参加者が関わっているデジタル化プロジェクトについての報告が行なわれ、それぞれについて議論が行なわれた。特に、大規模データベース事業のシステム更新に関わる知見を参加者の間で共有することができた。第2回の研究会においては、守岡知彦氏による東洋学文献類目のリプレースに関する報告と永崎研宣によるSAT大蔵経テキストデータベースの継続的な開発に関わる報告が行なわれた。特に、大型計算機からのシステムリプレースの困難さとドキュメンテーションの重要性に関する知見を深めることができた。第3回以降は公開シンポジウムという形で会合を開催した。まず、「東洋学におけるテキスト資料の構造化とWebの可能性」として、日本古典・近代の研究者、青空文庫ボランティア、インド中世、近代の研究者がそれぞれに講演を行ない、東洋学におけるテキスト資料構造化に関する検討を行なった。第4回は、著作権問題についての公開シンポジウムを行ない、著作権と学術情報流通に関する検討を行なった。第5回は、「翻デジ2014」を採り上げ、学術情報流通とボランティアの関わりに関する検討を行なった。

6. 研究成果の概要 (400字程度)

本年度の成果としては、上記のとおり研究会及びシンポジウムを実施したことから、大規模データベース事業のシステム更新に関わる知見と、大型計算機からのシステムリプレースの困難さとドキュメンテーションの重要性についての知見を深めたことが大きな成果となった。以上の2件については非公開で自由に議論を行なうという趣旨であったため、現時点では内容の公表等を行っていない。最終的な研究成果のなかに反映される予定である。第3回の公開シンポジウムについては、専門分野のメールマガジン『人文情報学月報』において共同研究班員である岩崎陽一氏及び北岡タマ子氏がレポートを連載中であり、現在のところ、最終の発表者と全体ディスカッションの報告を残している。第4回の公開シンポジウムについては、すでに岩崎陽一氏が上述の『人文情報学月報』に報告を執筆したところだが、さらに、勉誠出版『DHjp』第3号(近刊)において、このシンポジウムの報告を中心とした特集記事が予定されており、登壇者の半数以上が各自の論考を寄稿する予定となっている。第5回の公開シンポジウムについては、共同研究班員の後藤真氏が『人文情報学月報』にレポートを掲載したところである。

7. 共同研究会に関連した公表実績 (出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など)

【出版】

1. 永崎研宣「人文学においてデジタル技術はどう活用されてきたか：CH研究会研究報告を手がかりとして」『情報処理学会研究報告』2013-CH-98(7) (2013年5月), pp. 1-6.
2. Kiyonori Nagasaki, Toru Tomabechi, A. Charles Muller, and Masahiro Shimoda, "A Case Study of Integration of Services and Resources on a Web Service", Digital Humanities 2013, Lincoln (USA), (2013/7), pp. 517-519.
3. 川幡太一, 鈴木俊哉, 永崎研宣, 下田正弘「悉曇文字の国際標準化の動向」『情報処理学会研究報告』2013-DD-90(7), (2013年7月), pp. 1-4.
4. 和氣愛仁, 宇陀則彦, 永崎研宣, 松村敦「閉じる研究と開く研究の接点を目指して～筑波人文情報学研究会の挑戦～」『情報処理学会研究報告』2013-CH-99(5) (2013年7月), pp. 1-4.
5. 永崎研宣「大蔵経デジタル化の実践から見た「紙とデジタル」」『DHjp』第2号
6. Kiyonori Nagasaki, A. Charles Muller, and Masahiro Shimoda, "A Challenge to Dissemination of TEI among a Language and Area: A Case Study in Japan", The Linked TEI: Text Encoding in the Web, Roma (Italy), (2013/9), pp. 213-216.
7. 永崎 研宣, 三宅 真紀, 苫米地 等流, A. Charles Muller, 下田 正弘「人文学資料としてのテキスト構造化の意義を再考する 大正新脩大蔵経における脚注の解析とLinked Data化をめぐる」『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』(社) 情報処理学会(2013年12月), pp. 239-246.
8. 永崎研宣「大蔵経デジタル化の実践から見た「紙とデジタル」」『DHjp』No. 1, 勉誠出版 (2014年2月), pp. 66-71.
9. 永崎研宣「DHの現在を若い人たちに伝える」『DHjp』No. 2, 勉誠出版 (2014年3月), pp. 24-31.
10. 永崎研宣「大正新脩大蔵経とデジタル時代の学術情報流通」『DHjp』No. 3, 勉誠出版, 近刊.
11. 『DHjp』vol. 3 特集「デジタルデータと著作権」勉誠出版, 近刊.

【公開シンポジウム】

1. 2013-12-09 公開シンポジウム「東洋学におけるテキスト資料の構造化とWebの可能性」
於京大時計台記念館
2. 2013-01-24 公開シンポジウム「近デジ大蔵経公開停止・再開問題を通じて人文系学術
研究における情報共有の将来を考える」於京大時計台記念館
3. 2014-02-19公開シンポジウム+チュートリアル： 翻デジ2014：クラウドソーシングに
よる近デジ資料のデジタル翻刻 於京大人文研本館

【電子媒体】

1. シンポジウム「東洋学におけるテキスト資料の構造化とWebの可能性」（前半）（岩崎陽一）
メールマガジン『人文情報学月報』No. 30, (2014-01-28).
2. シンポジウム「東洋学におけるテキスト資料の構造化とWebの可能性」（後半1）（北岡タ
マ子）メールマガジン『人文情報学月報』No. 31, (2014-02-26).
3. 緊急シンポジウム：近デジ大蔵経公開停止・再開問題を通じて人文系学術研究における情報
共有の将来を考える（岩崎陽一）メールマガジン『人文情報学月報』No. 31,
(2014-02-26).
4. 公開シンポジウム+チュートリアル：翻デジ2014：クラウドソーシングによる近デジ資
料のデジタル翻刻（後藤真）メールマガジン『人文情報学月報』No. 32, (2014-03-27).

【講演】

1. 招待講演 “The Significance of Digitization of Buddhist Studies in the situation
of Digital Humanities in Japan”, Kiyonori Nagasaki, Around the World Symposium
on Technology and Culture, University of Alberta (Canada), University of Virginia
(USA), Trinity College Dublin (Ireland), Texas A&M University (USA), University
of Western Sydney (Australia), and International Institute for Digital Humanities
(Japan) (Virtual symposium via LifeSize ClearSea), (30-31 May 2013).
2. 講演：永崎研宣「SAT2012年版の目的と構造」, 日本印度学仏教学会学術大会, 於島根
県民会館, (2013年9月1日).
3. 講演：永崎研宣「Digital Dickens Lexicon version2」, 「高機能インターフェイスを
備えたデジタルディッケンズレキシコン作成とその活用研究」研究会, 於大阪大学, (2013
年9月6日).
4. 講演：Kiyonori Nagasaki, “SAT as a Leading Model for Humanities Researches in
the Digital Humanities Environments”, International Symposium: Humanities
Studies in the Digital Age and the Role of Buddhist Studies, University of Tokyo,
(16/11/2013).
5. 招待講演「東洋学のツールとしての翻デジ2014における諸課題」『東洋学へのコンピュ
ータ利用第25回研究セミナー』, 永崎研宣, 於京都大学(2014年3月14日).
6. 招待講演「Digital Resources of Japanese Texts: from a Viewpoint of Digital
Humanities」, Kiyonori Nagasaki, CJM and NCC: 2014 Joint Program, Philadelphia
(2014-03-27).

8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区 分	機関数	受入人数		延べ人数			
		外国人	大学院生	外国人	大学院生		
学内（法人内）	3	12	1	6	27	6	6
国立大学	4	9	1		17	1	
公立大学							
私立大学	3	2		2	10		2
大学共同利用機関法人	1	1			5		
独立行政法人等公的研究機関	1	2			11		
民間機関	11	46			46		
外国機関							
その他							
計	23	72	2	8	116	7	8

研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

(例) ・ 1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた（参加した場合）：参加人数2人、延べ人数6人

9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

(参加研究者がファーストオーサーであるものを対象)

論文数	4	
うち国際学術誌に掲載された論文数	4 ()	()

※下段の（ ）内には、拠点外の研究者による成果（内数）を記載。

(注) 分野の特性を踏まえて、参加研究者がファーストオーサーである場合の他に、コレスポンディングオーサーである場合や指導した大学院生がファーストオーサーになっている場合など、論文における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合は、その役割を明示の上で論文数を記載。

役割		
論文数		
うち国際学術誌に掲載された論文数	()	()

※下段の（ ）内には、拠点外の研究者による成果（内数）を記載。

※ 高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合、その雑誌名、掲載論文数、そのうち主なものを以下に記載。

※ 拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名

(注) インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合は、以下に適切な指標とその理由を記載上で、掲載雑誌名等を記載。

拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

インパクトファクター以外の指標とその理由		主なもの	
掲載雑誌名	掲載論文数	論文名	発表者名